

第61話「解決の道筋」

in the shade of family tree

木陰の物語



団 士郎

小学六年生の娘が長期の不登校。

一家は父、母、
長男、長女、
そして
父方祖母の
五人暮らし。



祖母と母とは、
よくあるように、
反りが合わない。

父は遠距離通勤のため、
早朝に家を出る。



そこで父の朝食は、
年寄りでは早起きだ
というので祖母が
支度して二人でとる。

一時間後、起床した母は
子ども達のために朝食を作る。



「朝食がばらばらなのは良くない。
みんなで！」
と助言したところ、
その取り組みをした。



朝早く出勤する父に
合わせたのだ。



母は五時起床の生活になった。



六時半には朝食が
済んでいる日々。



兄の登校には早過ぎ、
母のパート出勤にも
時間が余った



何よりも眠い。



不登校の娘は、
朝食後また寢床に
入ってしまう。



喜んでいたのは
父と祖母だけ。



この提案は間違っていた。



しほひくすると、
息子、娘の愚痴が
止まらなくなった。



家族揃って朝食をといつのは、
あまり意味がないように思えた。



両親面接で母から
正直にそう言われて
ハッとした。



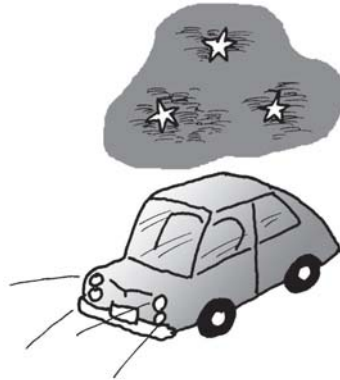
家族の
あるべし
みたいだね



そこで誤りを認め、
別課題を提案した。



夫婦で深夜に、
ドライブに出かける。



帰宅の遅い
父に合わせて、
週一回、
夜の十一時過ぎに、
スタートする。



普段の
早朝出勤を考えて、
金曜日の夜が
選ばれた。



母は二人きりになることに
照れて戸惑っていた。



しかしこの課題は実行された。



最初は助手席で
眠りかけていた
母だったが、



いつしかその日一回の
話をするようになった。



一時間のドライブ中、
子どものこと、パートのこと、
祖母とのいさかいのこと



それまでと比べると、
夫も話すことがぐっと増えた。

週に一度ドライブに
出かけることが
習慣になった。



これだけの話である。



娘の中学入学直後まで、
月に一度来談し、
このドライブを続けてもらった。

娘は新入学から
登校するように
なっていた。



それでも両親は今も時々、
二人で深夜ドライブを
しているそうだ。

